

白鷗大学における「教職実践演習」の講義 目的と学習成果との比較

内 田 雄 三¹・荒 井 信 成¹・大 木 俊 英¹
伊 東 孝 郎¹・奥 山 慶 洋¹

1. 問題の所在

2017年3月、新しい学習指導要領の概要が文部科学省より示された。いわゆる「ゆとり教育」からの脱却を目指して学力向上への対策がさまざま施された現行学習指導要領の流れは、新学習指導要領においてもおおむね継続されたようである。また「主体的な学び、対話的な学び、深い学び」というキーワードに凝縮された学習観の転換は、児童生徒の学習活動はもとより、教師の授業設計や実施方法にも相応の影響を与えることが予想される。今回の改訂に向けてはICTを活用した授業や反転授業などの新しいタイプの授業が各所で先駆的实践として模索されてきており、それらの成果がおそらく今回の改訂で想定される学習活動を支える具体的方法として示されることになっていくであろう。

その一方で、さまざまな施策により教師の多忙化に一層拍車がかかることが懸念される。こうした学習活動を構想・実践するのは教師であり、多様な形態で実施されている校内外での研修活動は今後も一層増加することになる。過去の歴史を振り返れば、その時々の方社会的要請や新しい授業スタイル、教科内容に関する研修が盛んに開催されてきた。主体的か否かを

¹白鷗大学教育学部

e-mail : uyuzosan@fc.hakuoh.ac.jp

別として、教師はそれらの研修に参加することを当然のこととして受け入れてきたのである。それは多くの教師が「子どもたちに良質の授業を提供したい」と願うからであり、そうした献身的な姿勢によって多くのすぐれた授業実践が生み出されてきた。今回の改訂においても、期待される成果は教師の日々の授業実践や創意工夫を凝らした教材研究を通して実を結ぶものと考えられる。

ところで2012年8月に中央教育審議会より示された答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」において、今求められる教師のあり方とともに、教師の必要とされる最低限の資質や能力が以下のように示されている。

(i) 教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力（使命感や責任感、教育的愛情）

(ii) 専門職としての高度な知識・技能

- ・教科や教職に関する高度な専門的知識（グローバル化、情報化、特別支援教育その他の新たな課題に対応できる知識・技能を含む）
- ・新たな学びを展開できる実践的指導力（基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探究型の学習、協働的学びなどをデザインできる指導力）
- ・教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力

(iii) 総合的な人間力（豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力）

また答申では「初任者が実践的指導力やコミュニケーション力、チームで対応する力など教員としての基礎的な力を十分に身に付けていないことなどが指摘されている。こうしたことから、教員養成段階において、教科指導、生徒指導、学級経営等の職務を的確に実践できる力を育成するなど何らかの対応が求められている」とも記されていることから、この最低限の資質能力は教師前教育、すなわち大学での教員養成段階で身につけるも

のと考えられる。教職に就いてからの向上が見られない場合は、指導力不足教員として判断されることもありうるのである。

さらに東京都教育委員会（2015）では教師の取り巻く現状と課題として以下の点を挙げ、その解決に向けた取り組みを具体化しようとする。

- ・学校をめぐる教育課題の複雑化・多様化
- ・家庭・地域社会の教育力低下による学校や教員に対する期待の高まり
- ・大量採用期世代の退職者の増加に伴う教員の量及び質の確保

言うなれば、こうした諸問題にしっかりと立ち向かうことのできる教師を求めている、という一種の宣誓ととらえることができる。

前述のように教員養成段階で身につけるべき資質能力や期待や要請をされている事柄は多くあり、教職に就いてからの成長では遅いとする向きもある。例えば、今津（1985）は教師の成長過程を他の職業とは異なる過程と言う。いわゆるインターンシップや就業前研修を入社後に実施する一般企業と異なり、新任教師は4月から一人前の教師として教科指導、生徒指導、学級経営等を他の教師と同様に行うことが求められている。これを「職業的社会化」とし、他の業種では見られないものとしているのである。つまり様々な問題が生じた際にも教師としての行動や立ち居振る舞いが必要であり、このことが初任期教師にとっての大きな負担となっているといえよう。2006年に起きた東京都西東京市および新宿区、静岡県での新任教員の自死事件は、初任期教師とかかわる教師集団や管理職のあり方について深く考えさせられるできごとであった（久富、佐藤、2010）。これはある意味ではどの学校でも起こりうることであり、そうした際の対応の難しさが露呈したものといえる。

文部科学省（2012）によれば、日本での教育職員免許状況は平成に入ってから毎年約11万人の学生が取得しているという。2008年度における小中高の教育職員免許取得者13万人のうち、実際に採用される教員数はその10%にあたる約1万2千人であることが示されている。もともと教職志望ではない学生が「教員免許くらいとっておこう」とする状況は本学に

においてもこれまでも見られているが、免許取得に欠かせない教育実習を請け負う各種学校では、そうした学生に対しても教育実習の態勢を整えざるを得ない。学校側の「教職志望でない学生の教育実習になぜ協力するのか」といった疑問はある意味で当然のものであり、こうした不自信も教員養成における数々の問題を誘発していると考えられる。

2012年度より教員免許取得予定者を対象に全国で開講された新科目「教職実践演習」は、これまで述べてきた種々の問題の打開策として、教員養成プログラムの最終段階の主な4年生の意識と知識向上に寄与すべく実施されることが求められている。おそらく各大学においても文部科学省より示された指導内容を受けてのシラバス作成には苦慮しているであろう。

本学でも特別の組織を編成して本科目の指導内容を検討の上で実施しているが、担当教員がそれぞれに悩みを抱え模索しながら取り組んでいる。現在本学教育学部ではスポーツ健康専攻、英語教育専攻、心理学専攻所属教員により随時調整を図りながら実施しているが、よい講義内容を、と思えば思うほど自身の授業運営に対する反省が数多く生じているのが実情である。また本科目が求める内容の充実に向けては試行錯誤を繰り返しているものの、どの程度学生に対する成果を上げているかはいささか心許ない。学生自身が本科目設定の意図をどの程度理解し取り組んでいるかについても同様に不安を抱えている。

2. 目的

本研究は現在の講義内容や付随する取り組みに対する学生からの評価をもとに充実した内容を探ることを目的とする。講義最終段階に学生が作成したレポートの記述を整理分析することとした。学生が本科目において何を学んだかについてその記述を分析することを通して、学生の学習成果と教師の意図との相違点を明らかにすることが期待できる。また3専攻生の意識の共通性や異なり等を浮き彫りにすることで、今後の指導内容の検討に有意な資料を得られるものと考えている。

3. 方法

本学の教職実践演習では、全15回の講義を終えた後、受講学生に対してレポート課題を課した。課題の内容は、以下の大問3題(課題1から3)で構成されている。

課題1. 以下の2つの課題から自身の状況に合わせて1つ選択し、考えをまとめなさい。

[教職志望学生向けの課題]

「生徒とともに成長する教師」とは何か。

[教職以外の職志望学生向けの課題]

教職に関して勉強した内容がこれから就く予定の仕事でどのように活かせるか。

課題2. 自身に該当する項目を選んで作成しなさい。

[授業参観に行った学生向けの課題]

各自が定めた参観の視点に基づいて、授業からどのようなことが見えたのか、また見えなかったのかを以下の項目立てで記述しなさい。

- (1) 授業参観校と参観日時
- (2) 参観授業の教科名と単元名 * できれば本時の主な内容
- (3) 参観時の視点
- (4) 授業についての報告

[授業参観以外の取り組み(一般企業へのインターンシップや部活動指導の補佐兼見学など)を行なった学生向けの課題]

- (1) 取り組んだ活動の場所と日時
- (2) 内容の紹介
- (3) 取り組んだ際の視点
- (4) 活動についての感想

課題3. 講義の全般的な感想 [全学生共通課題]

教職実践演習の受講学生によって作成されたレポートを収集し、KH coderを用いて、その内容をテキストマイニング法によって分析した。専攻ごとに抽出語の出現回数を算出し、階層的クラスター分析と共起ネットワーク分析を行なった。本稿の目的は受講学生の本講義に対する意見を集約することにあるため、課題3の内容のみを分析対象とした。

調査対象は2016年度に教職実践演習を受講した学生141名であり、その内データを回収できた126名（スポーツ健康専攻81名、英語教育専攻28名、心理学専攻17名）を分析対象とした。

4. 結果

4-1. スポーツ健康専攻の結果

スポーツ健康専攻の教職実践演習を受講した学生の内、データを回収できた81名を分析の対象とした。

4-1-1. 抽出語の出現回数

出現回数の多い語を抽出し、上位150位までを表1に示した。「生徒」は1067回と出現回数が最も多く、次点は「授業」、「思う」、「教師」、「考える」と続いた。

これらの頻出語について、1人あたりの出現回数（出現回数／分析対象81人）を算出した。その結果、「生徒」は13.2回／人、「授業」は8.1回／人、「思う」は6.5回／人、「教師」と「考える」は5.2回／人であった。これらの語は分析対象とした課題レポートに1人あたり5回以上用いられていることが明らかになった。

スポーツ健康専攻は保健体育科の教員養成をしている専攻であるため、「体育」94回や「運動」39回、「部」33回、「スポーツ」28回といった専門性に関わる語が抽出された。しかし、「保健体育」は23回、「保健」は12回と上位に含まれなかった。

表 1：出現回数上位150位の語（スポーツ健康専攻）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
生徒	1067	社会	89	行動	58	前	41	実感	33
授業	658	教える	88	子供	58	立場	41	情報	33
思う	530	経験	88	行事	57	意見	40	部	33
教師	424	見る	88	現場	56	能力	40	気	32
考える	419	持つ	86	話す	56	運動	39	向上	32
指導	372	取り組む	81	学級	55	気持ち	39	人間関係	32
学ぶ	253	理解	80	違う	54	考え	39	他	32
自分	246	言葉	79	信頼関係	54	今後	39	特に	32
成長	246	クラス	75	知識	54	姿勢	39	印象	31
先生	236	重要	74	常に	53	身	39	環境	31
行う	230	話	74	相手	53	力	39	向き合う	31
感じる	204	活かす	72	内容	52	子	38	働く	31
大切	181	活動	72	企業	51	築く	38	会社	30
教育実習	159	教職	71	準備	51	得る	37	学年	30
人	157	様々	71	学習	50	一番	36	小学校	30
子ども	148	今	70	関係	50	結果	36	少し	30
教員	147	実習	70	受ける	50	行く	36	展開	30
必要	141	言う	68	分かる	50	自分自身	36	雰囲気	30
学校	136	知る	67	多く	49	説明	36	立つ	30
児童	131	講義	65	難しい	49	大事	36	取る	29
教育	129	実際	65	楽しい	47	意識	35	変わる	29
仕事	125	たくさん	64	目標	47	課題	35	変化	29
多い	115	関わる	63	お客様	46	求める	35	スポーツ	28
自身	110	生活	62	参加	45	場面	35	一つ	28
聞く	98	積極	61	出る	45	信頼	35	解決	28
良い	95	大学	61	観察	44	地域	35	改善	28
コミュニケーション	94	就職	59	声	44	機会	34	関わり	28
体育	94	担当	59	中学校	44	気づく	34	作成	28
問題	92	伝える	59	作る	43	実践	34	場合	28
時間	91	研究	58	勉強	43	対応	34	人間	28

4-1-2. 階層的クラスター分析

次に、教職実践演習からスポーツ健康専攻の学生が得た知見や感想を階層的クラスター分析によって分類した（図1）。最小出現数を70回とした結果、7つのクラスターに分類された。図中の四角で囲まれた部分がクラ

スターを表し、左から順に第1クラスターから第7クラスターと呼ぶこととする。

まず、第1クラスターは「教師」「成長」「生徒」「考える」から構成されており、教師自身や生徒の成長について考える「教育の本質」が抽出された。

第2クラスターは「話」「聞く」から構成されている。本学の教職実践演習は現職の校長先生やスクールカウンセラーなどのゲストティーチャーの講話を聞く機会を複数回設けており、その感想が反映された結果と推測できる。

第3クラスターは「学校」「教育」「重要」「問題」「今」「社会」「人」から構成されている。本講義ではゲストティーチャーから現在の学校現場で抱える問題などに関する講話をいただいた。そのため、多くの学生が教育問題や社会問題について考える機会を得られた結果であると考えられる。

第4クラスターは「活かす」「教職」「学ぶ」「持つ」「仕事」「自分」「思う」から構成されている。本講義や教職課程だけでなく、大学生活全体を通して学び取ったもの、感じ取ったものを将来の仕事や教職に活かそうとする姿勢が表れている。

第5クラスターは「自身」「児童」「理解」「様々」「見る」「良い」「教える」「子ども」「大切」「感じる」「コミュニケーション」「必要」「言葉」「時間」から構成されている。このクラスターには、児童生徒を理解することが教育に大切であることが表れている。また、児童生徒の理解には、コミュニケーションや言葉、時間が必要であると学生が感じていることも見て取れる。

第6クラスターは「経験」「教育実習」「先生」「実習」から構成されており、教職実践演習を受講しながら、教育実習の振り返りをしていることがうかがえる。

第7クラスターは「クラス」「1」「教員」「体育」「多い」「指導」「授業」「行う」「活動」「取り組む」から構成されており、保健体育科教員を養成するスポーツ健康専攻ならではの保健体育科教育に関わる記述が抽出された。

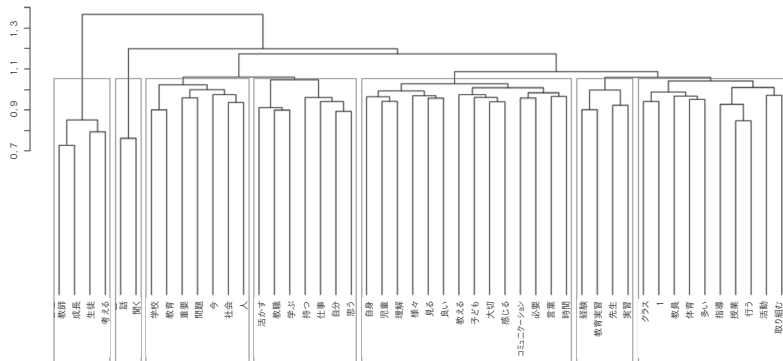


図1：階層的クラスター分析結果（スポーツ健康専攻）

4-1-3. 共起ネットワーク

最後に、最小出現数を70回、描画数を80に設定し、共起ネットワーク分析を行なった（図2）。その結果、スポーツ健康専攻の学生の多くは、教職実践演習において、生徒を取り巻く学校現場の問題について感想を持ったことがうかがえる。特に、強いつながりが見られる（太線で結ばれている）語は「生徒や教師の成長について」や「授業や指導に関すること」であった。また、「教育実習」と「自身」、「経験」の共起ネットワークが見られ、教職実践演習のねらいでもある「振り返り」が行われていることが明らかになった。

4-2. 英語教育専攻の結果

英語教育専攻は教職に就く者と一般企業等に就職する者の割合が例年半々で、今回データを回収できた28名のうち、実際に教職に就いた者（およびそれを目標に大学院に進学した者）は4割にあたる11名であった。英語教育専攻は例年このくらいの割合の学生が教職に就いている。

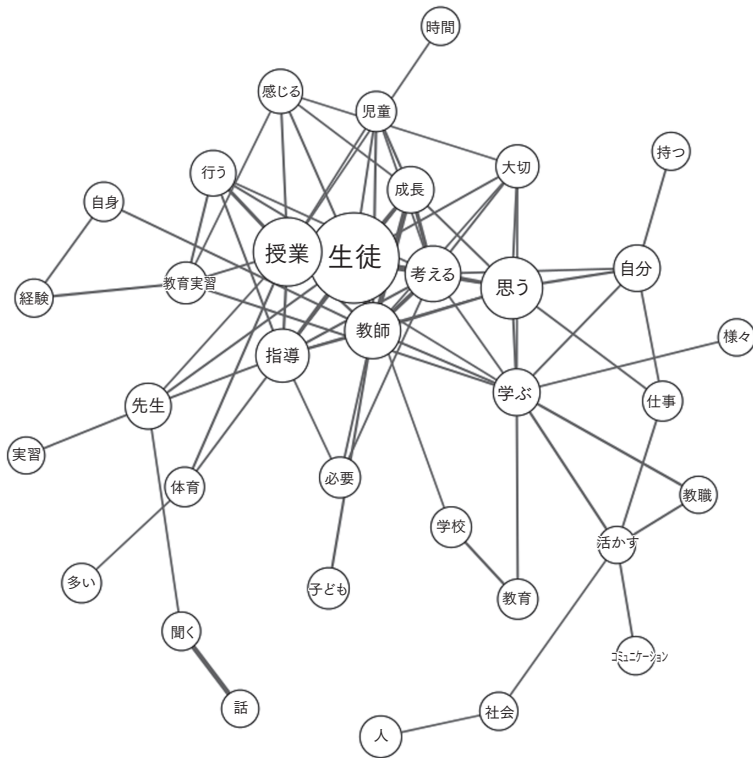


図2：共起ネットワーク分析結果（スポーツ健康専攻）

4-2-1. 抽出語の出現回数

表 2 は出現頻度 4 回以上の上位抽出語の一覧である。

特に多かったのは「授業」「思う」「講義」「専攻」「学生」「教育」「学ぶ」「自分」「先生」「行う」の10語で、ここまでが36回以上登場した語である。特徴的だったのは33回登場した「英語」である。その使われ方は「英語教育専攻」「英語教育」「英語の知識」「英語力」「英語の活動」「英語科教育法」「英語以外の教科」「英語のディベート」など多岐にわたり、自分の教科に関わる様々な事に関心を持っていることがわかる。「模擬授業」が24回登場しており、その多くは、他の専攻の学生に意見をもらえたことが貴

重だったという趣旨のものであった。また6回登場していた「ディベート」は教科別授業の回で行った活動で、他の専攻には見られない語である。

表2：出現回数4回以上の語（英語教育専攻）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
授業	75	内容	17	改めて	9	全体	7	今後	5
思う	64	良い	17	貴重	9	組織	7	実習	5
講義	61	指導	16	共有	9	大変	7	重要	5
専攻	46	勉強	16	経験	9	普段	7	少し	5
学生	45	グループ	15	校長	9	話す	7	職員	5
教育	45	関わる	15	今	9	スクール	6	触れる	5
学ぶ	44	多い	15	最後	9	ディベート	6	心	5
自分	40	聞く	15	視点	9	課程	6	成長	5
先生	39	考える	14	出る	9	確認	6	生かす	5
行う	36	クラス	13	将来	9	学習	6	体育	5
教職	34	講話	13	前	9	現在	6	大きい	5
英語	33	体験	13	必要	9	交換	6	中学校	5
感じる	33	特に	13	問題	9	終える	6	得る	5
生徒	30	持つ	12	様々	9	生活	6	難しい	5
学校	27	実践	12	たくさん	9	責任	6	非常	5
教員	27	他	12	カウンセラー	9	多く	6	分かる	5
教師	26	大切	12	健康	9	中島	6	方々	5
意見	24	話	12	残る	9	同時に	6	忘れる	5
機会	24	異なる	11	仕事	8	導入	6	目標	5
教職実践演習	24	実際	11	子供	8	発表	6	有意義	5
模擬授業	24	知る	11	新た	8	目指す	6	予定	5
受ける	22	印象	10	身	8	理解	6	違う	4
活動	21	考え	10	働く	8	立場	6	加える	4
知識	21	時間	10	お話	7	それぞれ	5	過ごす	4
現場	20	自身	10	エンカウンター	7	楽しい	5	関係	4
社会	20	就く	10	演習	7	環境	5	企業	4
人	20	心理	10	今回	7	気	5	興味深い	4
大学	19	専門	10	参考	7	気持ち	5	経営	4
教育実習	17	評価	10	就職	7	協力	5		
教科	17	スポーツ	9	出来る	7	行動	5		

4-2-2. 階層的クラスター分析

分析対象の語を減らすため、頻度12回以上の語（計48語）を対象として階層的クラスター分析を行った結果、図3のようになった。四角で囲まれた部分がクラスターを表し、左から順に第1クラスターから第7クラスターと呼ぶこととする。

第1クラスターには「先生」「講話」「学校」「現場」の4つの語が含まれ、第2クラスターの「指導」「生徒」「大切」「教員」「話」とあわせて、現場教員の講話を通じて生徒指導上の大切なことや、実際の学校現場について学ぶことができたという内容であることが見て取れる。コンコーダンスを用いて検索したところ、「中島聖巳校長先生から学校経営についての講話をいただき、学校組織や求められる教師像などの細かく詳細なことを知ることができました」などの感想があった。

第3クラスターには「体験」「教育実習」「英語」「教育」「講義」「受ける」が含まれている。コンコーダンスで確認したところ、「他専攻の学生の体験談は非常に勉強になりました」などのように、教育実習の体験を共有する活動が有意義であったということや、「自分が学んだ教育実習と照らし合わせつつ、大変参考になった」のように教育実習を終えた後に講義を受けられたことが更なる学びにつながったことなどが述べられていた。

第4クラスターには「機会」「学生」「専攻」「意見」「良い」「関わる」「人」が含まれ、クラスディスカッション等における他専攻の学生との関わりが良い学びの機会になったことが窺える。実際の感想には「今まで関わったことのない他の専攻の学生と関わり、共に学ぶことができるよい機会であった」などがあった。

第5クラスターには「大学」「教職実践演習」「社会」「自分」「思う」「教職」「学ぶ」が含まれている。コンコーダンスで「社会」を検索したところ、社会で役立つ内容や心構えを学べたといった感想や、それらを社会に出たときに活かしたいといった感想が見つかった。「自分」を検索したところ、内容は多岐にわたっていたが、そのなかでも、授業の活動を通して自分を

4-2-3. 共起ネットワーク

階層的クラスター分析で抽出できなかった内容がないか確認するため共起ネットワークを出した。一定の強さ以上の共起関係を持つ語グループを見つけるためJaccard係数を0.15に設定し、最小出現数も12回でなく8回に減らして描画した（分析対象の語は48から83に増加）。その結果が図4である。この図から、現場の校長やスクールカウンセラーによる講話が現場を知るのに役立ったこと、他専攻の学生の意見を聞くことで異なる視点を持たれたこと、教育実習の体験談を共有できたことが貴重であったことなど、階層的クラスター分析とほぼ同じ結果が得られたことがわかった。

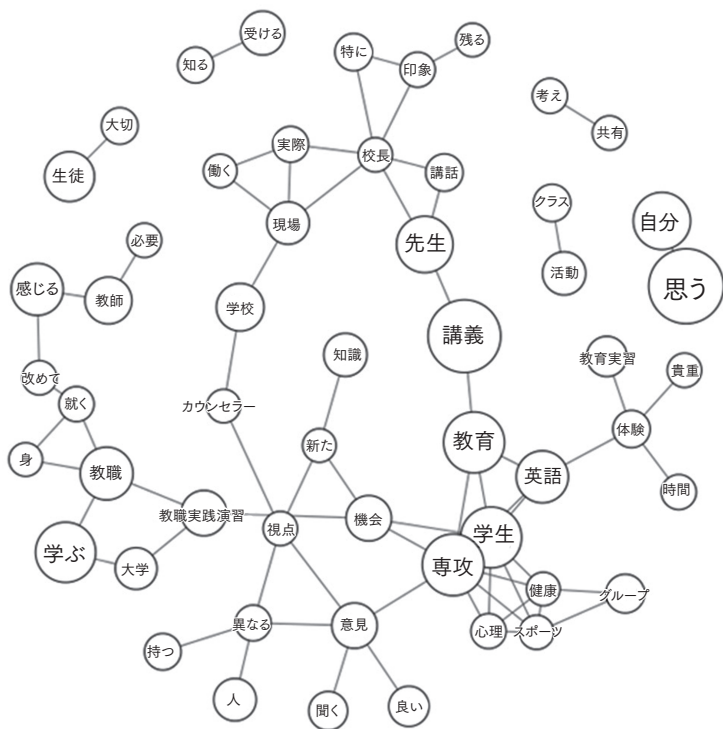


図4：共起ネットワーク分析結果（英語教育専攻）

以上の分析から、英語教育専攻の学生が教職実践演習の授業を通して、教員としてだけでなく、社会人としても役立つことを学んでいたことがわかった。しかし一方で、授業の改善につながるような記述は見当たらなかった。このレポートは評価に用いられたため、評価が下がることを懸念し、授業の批判と受け取られかねない内容を書くのは学生が避けた可能性がある。授業の改善には学生からの提案も不可欠なため、レポートを課す際に「授業の改善案を最低1つ述べること」といった指示をすることも必要かもしれない。

しかしながら以下の5点については専攻生の特徴として列記したい。

1. 講話を通じて教育についての見識を深めることができた
2. 模擬授業や討議での他専攻学生との関わりが良い学びの機会になった
3. 教員または社会人としての心構えができた
4. 教育現場や卒業研究で使える実践的な知識を学べた
5. 大学の教職課程や教育実習で学んだことの整理ができた

4-3. 心理学専攻の結果

心理学専攻は、回答した17名の学生のうち、実際に教職に就く者とそれを前提に大学院に進学する者があわせて3名しかおらず、他の専攻と比べてその性質がかなり異なる集団である。テキストマイニングの分析結果も、それを反映してか、少々ユニークなものとなった。

4-3-1. 抽出語の出現回数

表3は、出現頻4回以上の上位抽出語一覧である。

特に多かったのは、「授業」「講義」「自分」「思う」「生徒」「学ぶ」「先生」「感じる」で、ここまですでに25回以上登場した語である。特徴的だったのは、「社会」の23回である。「社会に出て」「社会人になって」等の使用と、免許種である「社会科」をともに含んでいるため、他の専攻に比べて多く用いられている。「グループ」も10回と、17名という母数を考えれば比較的出現頻度は高い。心理学を専攻する学生が、本科目の中でグループ

活動に関心を持つ傾向を示している。また出現回数はさほど多くないものの、特徴的な語として「心理」10、「グループエンカウンター」「コミュニケーション」「ディスカッション」5、「企業」「人間関係」4なども挙げられよう。これらは、心理学領域に関連の深い語という印象がある。

表3：出現頻度4回以上の上位抽出語一覧（心理学専攻）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
授業	46	仕事	11	教育実習	6	課程	4	分かる	4
講義	44	他	11	持つ	6	過ごす	4	流れ	4
自分	37	多い	11	生かす	6	外部講師	4		
思う	33	知識	11	生活	6	関わり	4		
生徒	33	グループ	10	体育	6	関係	4		
学ぶ	27	学生	10	得る	6	企業	4		
先生	27	心理	10	能力	6	共通	4		
感じる	25	様々	10	本当に	6	教える	4		
社会	23	違う	9	グループエンカウンター	5	見る	4		
専攻	23	活動	9	コミュニケーション	5	交換	4		
教職	22	経験	9	ディスカッション	5	広げる	4		
模擬授業	21	考え	9	印象	5	校長	4		
教育	20	行う	9	楽しい	5	講話	4		
教師	20	実際	9	貴重	5	在り方	4		
考える	20	必要	9	考え方	5	山口	4		
出来る	17	聞く	9	今回	5	就く	4		
人	17	改めて	8	今後	5	出る	4		
教員	16	教科	8	座学	5	少し	4		
自身	16	重要	8	最後	5	新た	4		
受ける	15	働く	8	参加	5	新鮮	4		
指導	14	内容	8	視点	5	人間関係	4		
意見	13	理解	8	児童	5	成長	4		
学校	13	お話	7	実感	5	中学校	4		
教職実践演習	13	英語	7	取る	5	伝える	4		
現場	13	活かす	7	深める	5	同士	4		
大切	13	関わる	7	聴く	5	特に	4		
知る	13	機会	7	問題	5	難しい	4		
時間	12	言葉	7	有意義	5	年間	4		
話	12	残る	7	立場	5	発見	4		
今	11	勉強	7	たくさん	4	部分	4		

4-3-2. 階層的クラスター分析

階層的クラスター分析の結果、図5のようになった。第1クラスターは他のクラスターとかなり独立したもので、「印象」「残る」「言葉」「問題」からなり、後に第2～6クラスターと関連づけられるクラスターである。授業の中で印象に残る言葉や問題が述べられたことによる。

第2クラスターは第3クラスターと近いもので、「活かす」「立場」「勉強」「教育実習」「本当に」「教員」「必要」からなる。教育実習以上に、様々な立場の先生から教員に必要なことを学び勉強になった、という内容による。

第3クラスターは「教職実践演習」「学ぶ」「教職」「授業」「講義」「自分」「思う」「グループ」「今」「楽しい」「人」からなる。教職実践演習という授業について、今までなかったグループ体験や講義は楽しかった、というような評価による。

第4クラスターは後に第5・6クラスターと関連づけられる。「コミュニケーション」「能力」「自身」「大切」「重要」「仕事」「働く」からなっていて、コミュニケーション能力は自身が仕事をしていく上で重要かつ大切なものだ、という内容によるもの。

第5クラスターは第6クラスターと近く、「話」「聞く」「最後」「英語」「体育」からなる。英語や体育といった他専攻の学生の話聞くことができた、という内容による。

第6クラスターは「視点」「教科」「指導」「今回」「社会」「生かす」「内容」「理解」「活動」「行う」からなる。今回、他の教科の指導法と内容を理解した視点を、社会での活動に生かしたい、という内容となろうか。

第7クラスターは第8クラスターと近く、「機会」「とる」「知識」「多い」「グループエンカウンター」「得る」「専攻」「受ける」「模擬授業」「違う」からなる。違う専攻も交えたグループエンカウンターや模擬授業から知識を得る機会が多かった、という評価による。

第8クラスターは、「有意義」「関わる」「現場」「教育」「経験」「実際」

「出来る」「持つ」「感じる」「知る」「他」「実感」「深める」「考え方」「心理」「考え」からなる。教育現場での実際の経験を知り、考えを深めることができたという評価による。

第9クラスターは第10クラスターに近く、「学生」「参加」「意見」「さまざま」「ディスカッション」「時間」からなる。ディスカッションに積極的に参加して様々な意見を交わす時間となったという内容。

第10クラスターは「教師」「考える」「学校」「改めて」「生徒」「先生」「今後」「児童」「生活」「お話」「聴く」「貴重」「座学」からなる。先生からお話を聴く座学は、改めて教師とは、学校とは何かを考える上で貴重だった、という評価による。

4-3-3. 共起ネットワーク

共起ネットワークを図6に示した。それぞれのクラスターに属する語がまとまって布置されている。左情報には、「学ぶ」を中心にして「自分」「思う」「授業」「教職」などの頻出語が並び、それが「先生」「講義」「生徒」「学校」などを介し、「様々」「意見」「聴く」や「生徒」「学校」「改めて」「実際」「現場」へと広がっている。また下方には、「残る」を中心に「お話」「印象」「言葉」「問題」「大切」「自身」といったつながりとなっている。右側には、「心理」「考え」「関わる」「有意義」から「生かす」「社会」「知る」へと続いている。

多くが教職に就かないという心理学専攻の教職課程学生にとって、教職実践演習で学んだ、学校や先生・生徒に関するさまざまな内容は、自身にとって大切な言葉や問題、印象として残り、今後広く社会で生かせると感じている、そんな有意義な学びの時間であったことが見て取れるように感じられる。

白鷗大学における「教職実践演習」の講義目的と学習成果との比較

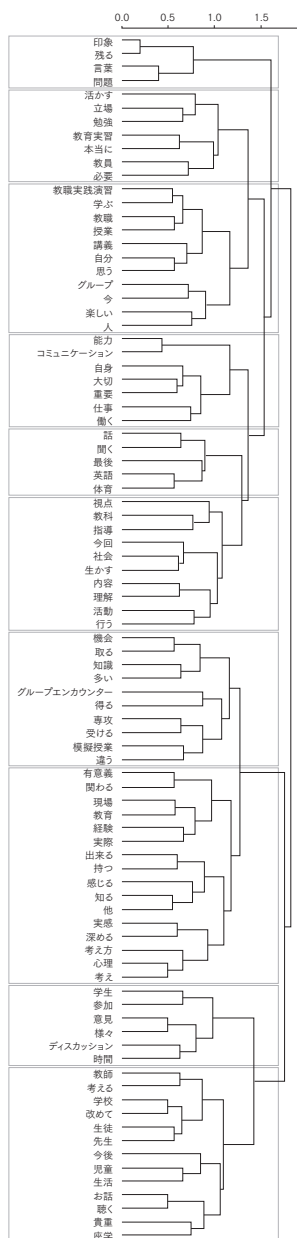


図5：階層的クラスター分析結果（心理学専攻）

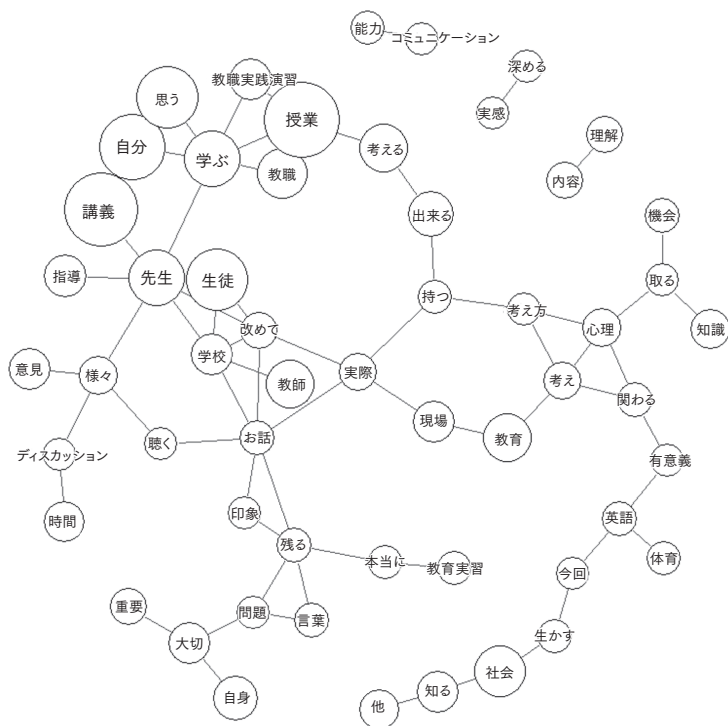


図6：共起ネットワーク分析結果（心理学専攻）

4-4. 専攻間の比較

4-4-1. 抽出語の出現回数

各専攻から抽出された語を出現回数が多い順に並べ、出現順位の上位30位までの語を比較検討した(表4)。

各専攻における出現順位の高い語は、3専攻でほぼ共通していた。多くの受講学生にとって「教育実習」や教職実践演習で経験した「模擬授業」を通して「現場」や「教育」、「社会」について「考える」機会となったことが読み取れる。

表4：各専攻の抽出語の出現回数上位30位

心理学			英語教育			スポーツ健康		
出現 順位	抽出語	出現 回数	出現 順位	抽出語	出現 回数	出現 順位	抽出語	出現 回数
1	授業	46	1	授業	75	1	生徒	1067
2	講義	44	2	思う	64	2	授業	658
3	自分	37	3	講義	61	3	思う	530
4	思う	33	4	専攻	46	4	教師	424
4	生徒	33	5	学生	45	5	考える	419
6	学ぶ	27	5	教育	45	6	指導	372
6	先生	27	7	学ぶ	44	7	自分	282
8	感じる	25	8	自分	40	8	学ぶ	253
9	社会	23	9	先生	39	9	成長	246
9	専攻	23	10	行う	36	10	先生	236
11	教職	22	11	教職	34	11	行う	229
12	模擬授業	21	12	英語	33	12	感じる	204
13	教育	20	12	感じる	33	13	大切	181
13	教師	20	14	生徒	30	14	学校	178
13	考える	20	15	学校	27	15	教育実習	159
16	出来る	17	15	教員	27	16	人	157
16	人	17	17	教師	26	17	子ども	148
18	教員	16	18	意見	24	18	教員	147
18	自身	16	18	機会	24	19	自身	146
20	受ける	15	18	教職実践演習	24	20	必要	141
21	指導	14	18	模擬授業	24	21	教育	133
22	意見	13	22	受ける	22	22	児童	131
22	学校	13	23	活動	21	23	仕事	125
22	教職実践演習	13	23	知識	21	24	体育	117
22	現場	13	25	現場	20	25	多い	116
22	大切	13	25	社会	20	26	関係	104
22	知る	13	25	人	20	27	聞く	98
28	時間	12	28	大学	19	28	問題	97
28	話	12	29	教育学習	17	29	良い	95
30	今	11	29	教科	17	30	コミュニケーション	94
30	仕事	11	29	内容	17			
30	他	11	29	良い	17			
30	多い	11						
30	知識	11						

黒色に白字は3専攻共通で抽出された語を示す。

灰色に黒字は2専攻共通で抽出された語を示す。

白色に黒字は1専攻のみで抽出された語を示す。

4-3-2. 階層的クラスター分析と共起ネットワーク

3専攻の階層的クラスター分析と共起ネットワークを比較検討した。

教職実践演習は、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたか確認する科目である。本科目では、教員として求められる以下の4つの事項を含めることが適当であるとされている。

1. 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
2. 社会性や対人関係能力に関する事項
3. 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
4. 教科・保育内容等の指導力に関する事項

教職実践演習受講後の感想を階層的クラスター分析と共起ネットワーク分析をすることで、教員として求められる4つの事項が学べているか検討することとした(図1から6)。

3専攻ともに「コミュニケーション」や「ディスカッション」、「意見」、「社会」などの語の共起ネットワークが抽出されており、「社会性や対人関係能力に関する事項」について学習されていることが明らかになった。階層的クラスター分析においても、スポーツ健康専攻では第5クラスター、英語教育専攻と心理学専攻では第4クラスターで「社会性や対人関係能力に関する事項」が表れている。

次に「生徒」と「大切」、「実際」と「現場」などの共起ネットワークが3専攻でみられ、「幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」の感想が浮かび上がった。階層的クラスター分析では、スポーツ健康専攻の第1・5クラスター、英語教育専攻の第2クラスター、心理学専攻の第10クラスターから「幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」が見て取れる。

また、「教科・保育内容等の指導力に関する事項」については、「英語」と「教育」、「授業」と「学ぶ」や「考える」、「体育」と「指導」などの共起ネットワークの結果に表れている。階層的クラスター分析においても、スポーツ健康専攻の第7クラスター、英語教育専攻と心理学専攻の第6クラスターに表出している。

しかし、教員として求められる4つの事項の内、「使命感や責任感、教

育的愛情等に関する事項」に関する共起ネットワークやクラスターは見られなかった。「教職実践演習で学んだことを今後活かしていきたい」という感想は多くみられたが、使命感や責任感といった強い想いは抽出されなかった。これは本学の教職実践演習の受講学生の中には教職志望以外の学生も多く含まれているため、教職に対する使命感や責任感、教育的愛情等が抽出されにくかったと考えられる。教職志望学生と教職以外の職志望学生に群分けし、分析を行なうことにより、新たな知見が得られると予想される。この点は今後の課題である。

5. 結論

本研究は科目「教職実践演習」の講義内容や付随する取り組みに対する学生評価をもとに充実した内容を探ることを目的とし、講義最終段階に学生が作成したレポート記述の整理分析を試みた。その際、学生の学習成果と教師の意図との相違点を明らかにすることや3専攻生の意識の共通性や異なり等を浮き彫りにすることで、今後の指導内容の検討に有意な資料を得られるものと考えて研究を進めてきた。

その結果、以下の点が明らかとなった。

各専攻生の記述には、本科目の目標である教職への深い認識をもつことに向けて授業内容を受け止め取り組んでいた様子がうかがえた。特に階層的クラスター分析では、5クラス合同の講義計4回でのゲストティーチャーの講義内容が散見され、本科目ならではの内容設定が履修生に対して一定の意義を感じさせていることが推察された。

また、本科目のクラス編成を3専攻混合にしていることは、専攻の壁を乗り越えて交流している様子とともに、所属外の専攻生から少なからず刺激を受けていることに繋がっていると推察された。4年生最後の必修授業という位置づけである本科目において、担当教員は専攻ごとのクラス編成では果たし得ない意見交流や情報提供に期待して混合の編成としてきたが、その狙いはある程度達成されていると考えられる。今後の方向性を考

える上で有用な示唆を得られた。

なお課題に関しては以下の点が挙げられる。

まず期末のレポートを分析対象としたため、学生のリアルな本科目への評価が記載されたかにはいささかの不安が残る。質問紙調査の項目設定や実施時期、資料回収の方法などについて、学生にできるだけ負担をかけずに行えるような方策を検討し実施に向けて準備する必要がある。

また各専攻とも、教職希望者と非希望者との関係性に基づく授業内容の検討も課題と感じている。本研究ではその点について検討をすることが出来なかったため、今後の課題としてぜひ進めていきたいと考えている。本研究においても3専攻での共起ネットワークから「使命感や責任感、教育的愛情に関する事項」への記述がみられなかったことは、一概に教職への非希望者の存在と関連付けることは難しいにせよ講義内容の検討に示唆を与えているととらえられる。両者を分離してクラス編成する、講義内容を2種類設定するというような問題ではなく、「教員免許を取得することの意味や意義」の点から、特に非希望者にとってこの講義の有用さを味わわせるような内容を検討していくことが有用であろう。

今後、本研究で得られた結果に基づき2017年度後期の実施する本科目の講義内容を吟味し講義計画を立案すること、さらにその実施後にも本研究で採用した整理分析の方法を用いて学生の学習成果を明らかにし充実した講義内容の策定を進めたい。

参考文献

- 今津孝次郎（1985）教師の職業的社会化，柴野昌山（編）『教育社会学を学ぶ人のために』世界思想社，pp.166-181
- 東京都教育委員会（2015）教員養成に関わる東京都教育委員会の取組，協同出版セミナー発表資料
- 中央教育審議会（2012）教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について
- 文部科学省（2012）学校教員統計調査
- 久富善之，佐藤博（編著）（2010）新採教師はなぜ追い詰められたか—苦悩と挫折から希望と再生を求めて—，高文研，pp.185